野鳥だより —北海道—

第３９号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　昭和55年４月１日

チゴハヤブサ　札幌市屯田　昭和54年９月22日　撮影　山本　一

もくじ

探鳥地案内（藤の沢）……2
新得山とその周辺の野鳥……藤巻裕蔵……3
チゴハヤブサの観察記録……山本　一……5
バードテーブルを作りましょう……編集幹事会……7
ウトナイ裏話……小山政弘……9
探鳥会案内……10
探鳥会報告……小樽　藤の沢……10
新年懇談会……12
鳥民だより……総会のお知らせ・各地の便りなど……12
編集後記……12

探鳥地案内 ⑨

藤の沢
小鳥の村

◆**位置**　札幌市南区藤野

◆**交通**　札幌駅からは定鉄バス、地下鉄真駒内駅からは市営、定鉄バスのどちらか、藤の沢で下車。

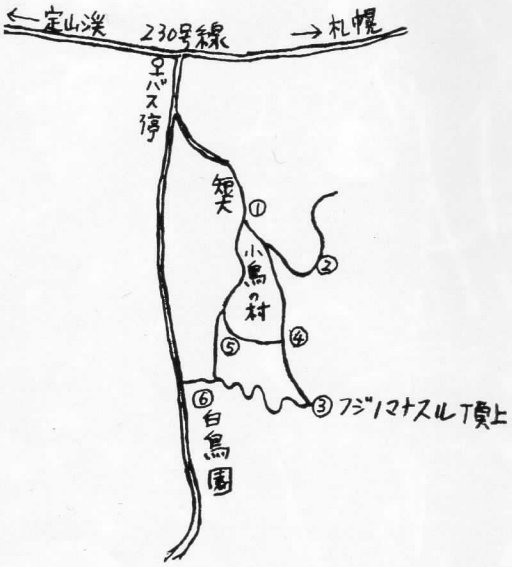
◆**探鳥コース**　訪れるのはやはりバードウィークの頃がよい。小鳥の村入口（看板あり）のオカバルシ川の橋にさしかかるとキセキレイが出迎えてくれる。橋を渡り坂道を登り切ると正面に栄養短大付属高校が現われ、白い壁をバックにイワツバメが飛び交い毎年校舎の壁に60個から100個の巣を作っている。校舎の前を通りグランドを抜けるといよいよ山道にかかる、ここで急がないで下さい。グランドの左側ではキジバトが餌をとっていることもあるし、正面のガケではキツネの親子がたわむれていることもあります。

山道に入ると左手のシラカバ林からホオジロのさえずりが聞こえ、急な坂道にかかるが、これを登らず、左側の針葉樹の小径①に入ります。林間に目をこらすと、オオルリ、アカハラ、キビタキの姿が見えます、針葉樹を通り抜けると眼の前が開け、イラクサ、エゾエンゴサク、福寿草の群落があり左手に回る山道がある。これを行くと足元からエゾライチョウが飛び立つことがあります。沢にかかるとコルリのさえずりが盛んです。沢を回り込んで一休み②、沢を正面に腰を下すと足下にシラネアオイがひっそりと咲き、カラ類、コゲラ、旅立ち前のマヒワの群を見ることもあります。今来た道を引し返し坂道を登りつめると通称「フジノマナスル」の頂上③に出る。ビンズイのさえずりが聞こえ上空にはトビが舞いハヤブサの姿を見ることもあります。帰りは西側に下れば小鳥の村村長の小沢さんが経営する白鳥園⑥に出る。村長さんの放談を聞くのもよし、登って来た道を引き返えす手もある。

カラマツ林を④左に下ると沢に出るここも野鳥観察のポイント⑤でヤブサメ、コルリ、カラ、センダイムシクイ、メボソムシクイの声が聞かれます。小鳥の村に散らばる巣箱にも注意して下さい。

（小堀煌治）

◆**地図**（石山25,000分の1）



〒061―22　札幌市南区藤野278

新得山とその周辺の野鳥

藤　巻　裕　蔵

観察地域と環境

汽車で狩勝トンネルをぬけて十勝側に出ると、十勝平野が眼前にひろがる。畜産試験場の構内を大きく蛇行しながら峠をくだって最初につく町が新得である。新得はアイヌ語の「シントク」すなわち「シリ・トク」（山の突出の意味）に由来する。ちょうど新得山が十勝平野につき出すようにみえるからであろう。この山は新得市街の西北にあり、標高 456 m の小高い山で、南と西斜面は落葉広葉樹の林になっており、山麓には新得神社があって、その周辺には常緑針葉樹もある。山の東側はスキー場、北側はトドマツやカラマツの造林地になっている。私は新得山とその周辺の市街地、農耕地で1976～79の４年間野鳥の生息状況を調べた。

鳥相の概要

この間に記録したのは76種（表参照のこと）である。調査した地域は４つの環境、すなわち落葉広葉樹林、造林地、農耕地、住宅地にわけられる。林の主な野鳥は、繁殖期にはアオジ、ハシブトガラ、シジュウカラ、キビタキ、センダイムシクイ、イカル、シメ、コルリ、ハシブトガラスなどで、種類数も40種近くおりもっとも多い。また冬にはハシブトガラス、エナガ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、ウソ、オオマシコ、カケス、ヒヨドリなどが主な野鳥である。

農耕地には畑や牧草地のほかに防風林や小面積の林があるため、森林性の野鳥も生息し繁殖期には30種近くが記録され、林についで種類数が多い。この環境ではスズメ、アオジ、キジバト、ハシボソガラス、ノビタキ、ビンズイ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメなどが主な種である。

造林地ではまだ植えられた木が小さく、全体がササ原のようなので、野鳥も少なく、繁殖期にはアオジ、ベニマシコ、モズ、ホオジロ、カワラヒワ、エゾセンニュウなど19種が見られただけである。住宅地ではスズメだけが多く、他の野鳥は少なかった。

いくつかの種について

表にあげた76種のうち、いくつかの種について簡単な説明を加えておこう。

イカルチドリ：佐幌川の河原で観察されたが、いままで公表されている十勝地方の鳥の文献には記録がなく、十勝では初記録である。

イワツバメ：新得駅舎で営巣している。

コマドリ：普通は渡りの途中にみられるだけだが1977年には６～７月に新得山で１度づつさえずりがきかれた。しかしこの付近には定着していないと思われる。

メボソムシクイ：1978年６月３日に農耕地内の林でさえずりをきいた。北海道でこの鳥は渡りの時期にわずかに観察されるだけで、繁殖期間中ずっと生息している例はまだ知られていない。

ヤマガラ：1976年11月29日に３羽、12月16日に１羽がカラ混群中にみられた。十勝地方におけるヤマガラの観察例は非常に少ない。

クロジ：渡り途中の個体が見られるが新得山では単独または数羽の群でおり、雄はまださえずっていなかった。

ベニヒワ：1976～77の冬には数が多かったが、1977～78の冬にはほとんど姿が見られなかった。

ハシボソガラスとハシブトガラス：繁殖期にはハシボソガラスは農耕地に、ハシブトガラスは新得山の林に生息しており、両者の営巣環境ははっきりわかれている。しかし住宅地では２種とも同じようにみられる。また冬には農耕地でも２種ともみられるようになる。

カケス：1976～77年の冬には数が多く、よく見られたが、1977～78年の冬にはほとんど姿が見られなかった。

新得山とその周辺の野鳥

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ワシタカ	トビ			―	―								
	オオタカ									―		―	
	ハイタカ						―						
ライチョウ	エゾライチョウ				―	―	―	―	―			―	
チドリ	イカルチドリ						―						
シギ	イソシギ					―	―						
	ヤマシギ						―		―				
	オオジシギ				―	―	―						
ハト	キジバト				―	―	―	―	―	―	―		
	アオバト						―	―	―				
ホトトギス	カッコウ					―	―	―					
	ツツドリ						―	―					
フクロウ	フクロウ								―				
アマツバメ	ハリオアマツバメ						―	―	―				
キツツキ	アリスイ						―						
	ヤマゲラ		―		―	―	―			―	―		―

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
キツツキ	アカゲラ	―	―		―	―		―	―	―	―	―	―
	コゲラ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
ヒバリ	ヒバリ				―	―	―						
ツバメ	イワツバメ						―	―	―				
セキレイ	キセキレイ					―	―						
	ハクセキレイ				―			―	―				
	セグロセキレイ	―	―				―						
	ビンズイ				―	―		―	―	―			
ヒヨドリ	ヒヨドリ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
モズ	モズ				―	―	―	―	―				
レンジャク	キレンジャク	―	―										
ミソサザイ	ミソサザイ										―	―	
ヒタキ	コマドリ				―		―	―					
	コルリ					―	―	―	―				
	ノビタキ				―		―	―	―				
	マミジロ					―							
	トラツグミ				―	―	―	―	―	―			
	クロツグミ				―	―	―	―	―				
	アカハラ				―	―	―	―	―				
	マミチャジナイ									―	―		
	ツグミ	―	―		―							―	―
	ヤブサメ				―	―	―	―	―				
	ウグイス				―	―	―	―	―	―			
	エゾセンニュウ						―	―	―				
	コヨシキリ							―	―				
	メボソムシクイ						―						
	エゾムシクイ						―						
	センダイムシクイ					―		―	―	―			
	キクイタダキ												―
	キビタキ					―	―	―	―	―			
	オオルリ					―	―			―			
	コサメビタキ					―	―	―					
エナガ	シマエナガ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
シジュウカラ	ハシブトガラ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
	ヒガラ		―	―		―					―		
	ヤマガラ											―	―
	シジュウカラ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
キバシリ	キバシリ	―			―	―					―	―	―
ホオジロ	ホオジロ				―	―					―		
	ホオアカ						―	―					
	カシラダカ										―		
	アオジ				―	―	―	―	―	―	―		
	クロジ				―								
アトリ	アトリ				―							―	
	カワラヒワ				―	―	―	―	―	―	―		―
	マヒワ				―								
	ベニヒワ											―	―
	オオマシコ	―	―	―								―	―
	ベニマシコ				―	―	―	―	―	―	―		
	ウソ	―	―	―	―							―	―
	イカル				―	―	―	―	―	―	―		
	シメ		―		―	―	―	―	―	―	―		
ハタオリドリ	ニュウナイスズメ				―	―	―						
	スズメ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
ムクドリ	コムクドリ					―	―	―					
	ムクドリ					―	―	―					
カラス	カケス	―	―	―	―	―	―			―	―	―	―
	ハシボソガラス	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
	ハシブトガラス	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―

（〒080 帯広市稲田町西２線13番地）

チゴハヤブサの観察記録

山　本　　一

はじめに

私は昭和54年５月下旬から約３ヶ月間、札幌市内北区屯田地区の創成川のポプラ並木に営巣したチゴハヤブサを観察し、３羽の雛が無事巣立ったのを見届けた。巣作りは５月下旬にはじまり、６月中旬には抱卵、７月上旬頃に孵化し、８月３日にはまず１羽が巣立ち、８月６日には３羽の雛を巣外で確認した。以下その記録である。

この鳥の大きさはハト位で長い翼をもち大変速く飛ぶ（最高時速約240㎞）。私はこれをカメラに収めようとしたがなかなかうまく撮れないので、大抵は樹の枝などに止ったところを狙ったわけである。この鳥の抱卵、育雛、巣立ち、その後の幼鳥時代まで朝夕観察に出掛けたので、鳥たちとすっかり顔染みになったことと、人間社会でいえば「人見知りしない」鳥に出合ったせいか十数ｍの近距離まで近づき、僅か焦点距離300ミリのレンズで撮ることが出来たので写真は割合に迫力があるのではないかと思う。

カラスとの関係

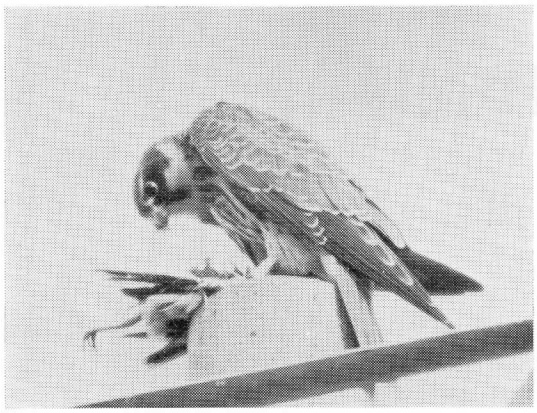
この鳥はハトに関しては終始警戒心が全くないようにみえた。しかし番（つがい）で営巣中、他のチゴハヤブサが飛来して近くの樹の枝に止りかけたところ、忽ち追払われるのを見た。また、カラスに対しては激しい敵愾心をもっているようで、巣から例えば500ｍ位にカラスが近づいても出撃し、挑戦して追払っていた。（７月４日、９日、22日、８月20日）あるとき、遙か彼方の藻岩山の方向からカラスが10羽近くカァカァと鳴きながら創成川沿いに北上、巣の上空を通過しようとする気配をいち早く察知した番のチゴハヤブサは、互いにキィーキィーと鋭い声で叫び合いながら矢のような速さで急上昇し、横転、反転、急降下の空中戦の後、あっという間にカラスの群れを巣のずっと手前で四散せしめた。（８月15日）巣を作りはじめた頃から３羽の雛が巣立ちし、幼鳥となって巣の近くに留まっていた３ヶ月間、注意深く観察していたがカラスは遠くを迂回して飛ぶのは見たが、上空を通過するのはついに見掛けなかった。近くで野菜作りをしていたおばさんによれば、毎年ここで畠を作っており、カラスの為に春の種蒔きの頃はほじられ、発芽の頃は芽を啄まれ、追払ってもまたやってくるので腹立たしく思ったが、あの鳥がカラスの巣を横取りして巣を作ってからはカラスが全然よりつかなくなり、作物の害もなく大変助かるということであった。

抱卵―孵化―給餌

チゴハヤブサの巣は地上から約18ｍのポプラの木の股に枯れ枝で作った粗末なものであるが、抱卵は辛棒強く続けているように見えた。巣の中から首をもたげて周囲を見渡し、また首を下げてうずくまるということもあったり、尻尾だけ見えることもあった。（７月２日）多分向きを変えることによって卵が平均に暖まるようにしているのだと思われた。

チゴハヤブサの抱卵中には暴風雨のこともあったし、物凄い雷もあって、新聞等で落雷による死者も報ぜられた程であった。私はもしかしたら逃げ出してしまったのではないか、巣もろとも吹き飛ばされてしまったのではないかと心配して見廻りに行ったが、巣を放棄するどころか側面が濡れて見える巣を上から相変らず抱いていた。この鳥はトンボ等の昆虫（８月20日）スズメ、カワラヒワ等も餌食にし、それらの内臓を好んで啄む。幼鳥が親鳥の運んでくれた餌を食べ残し落下させたことがあるので落した肉片（18ｇ）を調べ、その大きさからスズメよりは大きい鳥でヒバリかコムクドリ位の鳥であろうと推定した。

親鳥のエサを待つ幼鳥２羽　54年８月16日



電柱上でチゴハヤブサの幼鳥　54年８月16日

獲物の捕獲

チゴハヤブサは遠くからスズメなどを捕えてきて巣に運ぶのに、近くの樹又は電柱などに止っているスズメ、モズ等に襲いかからず、またスズメたちも恐れる様子もない場合を何回かみているが、不思議な習性だと思う。

チゴハヤブサが獲物の野鳥を追いかけて失敗して逃げられてしまったのを２回見た。（８月19日９月20日）快速の筈のこの鳥が執拗に追いかけずにあっさりあきらめたように見受けられたのは意外であった。

この地区はスズメとかコムクドリが沢山おり、あるとき中空に舞い上った群雀の中にチゴハヤブサが突込み、そのうちの１羽を捕捉し、捕捉された鳥がバタバタもがいているともう１羽のチゴハヤブサが近くよりさっとつかみ直し、とどめをさしたという場面を見掛けた。（８月14日）また、つかみ直しではなく、遠くから餌を運んで巣の近くまで飛んで来て空中投下により途中まで出迎えの鳥に受取らせたのも見掛けた。（８月12日）なお、餌を運搬する経路は大抵創成川の上、即ちポプラ並木沿いであった。また、出迎えではなく雄（？）が巣の近くで張番をしている雌（？）に一度手渡す。次に手渡しを受けた雌はその餌を巣の雛に運ぶ、換言すれば運搬の経路が直線でなく三角形を構成するというのを何回か見掛けた。ちようど野球の試合のときセンターが打者のフライを受取ると、直線的にピッチャーに返すのではなく、あちこち転送して戻すというのとちよっと似ていて、チゴハヤブサの互いにキィーキィーと鳴き叫びながらの諸動作の中に獲物を得た喜びが察知できた。

親が雛に餌を与えるのに生まれたての頃は口移し、雛が少し大きくなると毛をむしった餌を与えて自ら啄むようにさせる。更に巣立ち後の幼鳥にはまるまる１羽与える。そしてパッと飛び去るから幼鳥は人間でいえば馴れない手つきとでもいうべきか、両足で餌をしっかりつかみ、翼をバタバタさせて身体の均衡を保ちながら食べる。空腹に堪え兼ねて夢中で食べているようなときでも、ときどきは啄むのをやめて周囲をキッとした感じで警戒するというか睥睨（へいげい）する。

雛の行動

雛の行動半径は、始めは巣の中心だったのが巣の周辺、次は１～２ｍ周辺の樹上というように段階的に延びる。巣立ちしてからはスズメの巣立ちのように何処に行ってしまったかわからぬということではなく、行動半径は100～300ｍ（８月13日）、次は500ｍというように拡がる。（８月17日）そして次第に距離も延び、飛び方も低空から中空へ舞い上り速度も速くなり、上昇や急降下もできる。（８月21日）

雛は巣立ちする頃には一見大きさは親鳥と見間違える大きくなるが、親鳥に比べて運動神経の発達は未だという感じで、木の枝に止まる足どりもぎこちなく自分の長い翼を木の枝に引掛けてしまい一寸困惑した状況を見せたりする。幼鳥は暫くは巣の近くに留って親鳥から餌の補給を受けるわけで、たまたまあるときまだ少ししか食べていない獲物を幼鳥が取り落してしまった。下は創成川の流れである。それを見て他の幼鳥、親鳥もキィーキィーと鳴き立てた。人間の家庭で食事中幼児が茶碗をひっくり返してちょっとした騒ぎになるにも似ていた。（８月11日）また、親鳥から貰ったばかりの餌を幼鳥が樹の枝の上で両脚でしっかり一度はつかんだかのように見えたのに一口も口にしないで取り落し樹の下の創成川の流れのままにまかせてしまったときは、その幼鳥だけは一匹しよんぼり木に止ったままで、他の家族全員は樹から飛び立ち空中に輪を描いて飛廻りキィーキィーと鳴きたてた。多分、折角の餌物を失って残念とか取り落した幼鳥をたしなめているように見受けられた。（８月13日）中空を飛ぶトンボを捕えるのに親ならば多分高速でさらってしまうところを幼鳥は中空で苦労して静止に近いような形で捕えたのも見た。（８月17日、19日）

生まれたばかりの雛は綿帽子をかぶり灰色でムクムクした感じ（７月12日）だが、その後の成長の早いのには驚くばかりで７月26日には早くも雛は長い翼をバタバタさせる。そして幼鳥となった今親鳥と並んだとき幼鳥の方が何となくふんわりした感じで、親鳥の方は引締った感じである。幼鳥の羽はまだ親鳥のように発達して長い

という程でない。成鳥の著しい特徴である下腹部の赤色もまだ目立たず、胸に黒い斑点があるのは幼鳥も親鳥も共通であるが斑点のバックになるところが幼鳥は橙色で、親鳥は灰色である。幼鳥はかなり大きくなっても注意して見ると人間のうぶ毛にも相当するサシ毛が残っている。

チゴハヤブサの生活

チゴハヤブサが創成川のポプラ並木に止る場合、大体止まる樹は決っているようで木の枝が川面の方に横に突き出ていて止り易い枝である。即ち並木を背にすれば視界が開け手稲山がよく見える。川の上は障害物もないで

南の方は藻岩山、北の方は茨戸の方まで見通せる。このような枝に止っていると真下は川であるから外敵も簡単に近寄れない。（川の左岸にはポプラ並木がないので電柱又は電線にとまる。）このような止り場で幼鳥は親鳥から餌の補給を受け、食べ終ると嘴を木の枝にこすりつけて清掃し、手づくろいをし、翼や脚を十分伸ばして身体の調子を整える。夏の西日を浴びて気持良さそうに居眠りもする。居眠りのとき丸い大きな目玉が黄色の瞼で被われるのが特徴的である。居眠り中ヘリコプターが騒々しい音を立てて上空にさしかかると左右の耳を傾けて一応警戒の様子であるが、ヘりの音に馴れているのが瞼を半分開閉する位で別に逃げない。（8月10日）しかし花火のときは異なる。近くのスーパーが売出しとか朝市開催で花火を上げるとあわてふためいて逃げ廻る。逃げるときは空高くではなく低空で右往左往する。（9月14日）

チゴハヤブサの鳴き声はキィーキィーと言う位のものであるが、人が聞けば単純のようでも声の高低、アクセント等によって例えば「憎きカラス、追払ってやる」とか「獲物がとれた、バンザーイ、バンザーイ」とか「お腹がすいた、母さんの帰り今日遅いな」とか「少しお腹すいたけど我慢できなくては」とか「親が苦労してとって来た餌を落してしまうなんて、そんなヘマをやるようでは厳しい自然界に生きていけるか」とかという具合に仲間の間では鳴声が言葉として意志が通じているものと信じている。

おわりに

137万都市の札幌市の都心より7km位のところでチゴハヤブサが営巣し、3羽の雛を巣立ちさせることができた原因を私は①創成川の河畔はまだ緑地が多く餌になる昆虫や小鳥も多いこと。②愛鳥思想が普及して昔のように空気銃で撃ったり、石を投げつけたり、木に登って卵を取るようなことをしなくなったこと。ではないかと考えている。

野鳥の住めるところには、まだ人間も住めると言われている。今年も是非チゴハヤブサが飛来してくれるようにと念する次第である。

〒001　札幌市北区屯田4―2―145

バードテーブルを作りましょう

はじめに

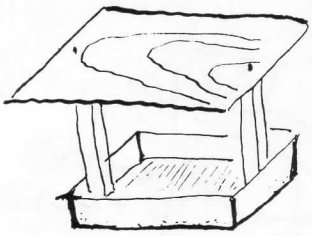
ながい冬は雪の中、野山にでかけて鳥達を見るにも、なかなか面倒です。ところが、野山が雪に覆われてしまうと、餌台のある冬の庭には、たくさんのお客さんが訪れます。今号の探鳥会報告にもあります、藤の沢もそんな場所です。餌台を設けて身近に鳥達と会うために、札幌市内の会員の方々から餌台の事をいろいろ教えていただいて、まとめました。雪どけとともに訪れてくる鳥達も減ってきますが、来年の冬、あなたの庭にたくさんのお客を迎える準備の参考にして下さい。

餌台を設けてすぐ来訪者を迎えることもありますがなかなか来てくれないことが多いようです。屋根が付いていると余計に警戒してやってきません。安全だとわかるまで時間がかかるようです。ただ地面に撒いた餌でさえ鳥達が気づくのに時間がかかりますから、気長に待って下さい。まわりに鳥達を脅えさせるものがあるかないかも考えて下さい。

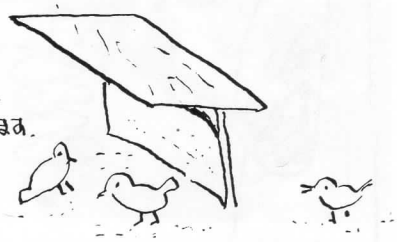
スズメ達が来たら、しめたものです。彼らは安全信号彼らにつられて、他の仲間がやって来ます。

餌台、餌の置場所

いろいろなスタイルが考えられます。中には餌台を警戒してなかなか上ってこない鳥もいます。彼らにはただ地面に撒いてやるだけでいいのです。そういう鳥達ばかりではないですが、何も設けなくてもよいから、これが一番簡単です。しかし、雪が降ってくるとこれでは困ります。ただの板ぎれ一枚やザルを置くだけでいいです。けれども冬には雪対策で屋根が必要です。屋根があっても吹雪では埋ってしまいますし、また強い風で倒れてしまいます。低いと雪にも埋れるので、長い足をつけると



漬物の箱に板の屋根をつけたもの。



写真用に片屋根にしてあります。

トタンぶき本格派
40cm×60cm 高さ1.2m

か、あるいは踏み固めた雪の上にのせられるように固定しないものを作るなど工夫して下さい。要は自分のところで飼っているつもりで、餌の心配をしてやってほしいということです。

餌

とりたてて買ってくることはありません。それよりも毎日彼らが餌のとれる状況を作ってやるのが重要です。雪に埋っていたり、餌が風で吹き飛んでいたりしていないか、よく気を付けて下さい。

さて、鳥達は何でも食べます。お仏壇に上げた御飯、トースターの中にたまったパンくず、ポテトサラダの残りなどです。買ってきた小鳥の餌ももちろん結構です。いずれ何種類かの小鳥がやってきますから、彼らの好みもわかってくるでしょう。以下いくつかのグループにわけて紹介します。

◇餌台にのせる

◦お家の残りもののパン、ごはん(洗ってねばりを取る)

魚の骨、煮干のクズ、菓子のくず

◦山から持ってきて貯えておく

コクワ、キハダ、ヤマブドウ、ツルウメモドキ、アカザやマツヨイグサの種

◦買ってきた小鳥の餌など

トウモロコシ、ヒマワリ、ピーナッツ、クルミ、青米。その他リンゴの砂糖煮など

◦果物

リンゴ、カキ(リンゴは板にさしたり、ぶらさげたりしてもよい。)

◇木につけたり、ぶらさげたりする。

◦脂身、鳥達はこれが大好きです。みかんの入っているネットの袋をとっておいてぶらさげます。(クルミを入れておくのもよい)割ったクルミを木にとめる。殻つきのピーナッツを糸に通してぶらさげる。

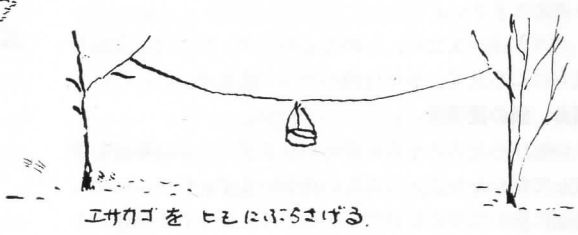
◇容器に入れる。

◦果汁、リンゴ、ミカンなど

以上でバードテーブルの基本的な事は説明しました。皆さんもこれを参考にして、鳥達との交流を深めて下さい。

いたづらもの対策

猫が隠れる物や彼が登ってくる足場はないでしょうか。鳥達を驚かす猫はともかくとして、カラスやドバトは他の小鳥達をおっぱらってしまったり、餌を独占してしまいます。同じ鳥だから、彼らを差別するのは良くありませんが、彼らには遠慮してもらうことにします。その方法として、カラスがやって来たら鏡でピカリと反射



してやると、驚いて来なくなるということです。それから餌をやるとき、彼らの嘴が入らないような網や籠の中に餌を入れるのも一つの方法です。

北郷では、最初レンジャクやイスカ、ベニヒワの群れが訪れていた餌台も、囲りに住宅が建てこんでくるとともにドバトが増え、ドバトにすっかり餌台を占領され、とうとう給餌をやめてしまったところもあります。

こんなのは、どうすればよいか良い知恵があれば教えて下さい。

春になったら餌台をやめましょう

春の訪れと共に雪が融け、隠れていた大地が見えてくると鳥達の餌も増え、それと共に訪れてくる鳥達もしだいに減っていきます。木々の葉が開くようになったら餌台をやめて、今度は人間の方が鳥達の所へ出かけてください。

（編集幹事会）

ウトナイ裏話

小山政弘

——（1）——

多分高校生の時以来の付合いなのだ。体育の時、うかつにも運動着を忘れ、友人から借りてつけたのが不運だったのか、以来18年を経た今日も尚、時に釈然とせぬむず痒さ故に人前で苦慮することがある。野外で時を過ごすことは、実に幼い頃から好きだったが、たった一人で野外観察に出向く楽しみは、どうやらいけずな菌さんの賜物のようだ。それも、まばゆい程の晴天ともなれば、無性に社会生活が煩わしく思え、孤独な観察行とは相なる次第。

ウトナイ沼岸草原は、最高の物干し場である。季節は初夏が抜群の値。ようやく若葉が勢いづいたワレモコウに、白花のスミレやらヨシの幼葉が戯れ揺れる微風の中。燦々と広がる陽の光にオゾンの香り。遠くでホオアカの囀り。空には数羽のオオジシギが追い回わしのディスプレイ。耳元でノビタキのカミサンが気丈ないい方で「出て行ってョ。」と、やかましい。ダンナの方は何とも物腰静かで神士調の遠まわし。大したいい男でもない奴が、よりによってズボンを半ばずり落とし大の字の表向きでひっくり返っている。あまつさえ、恐れ乍らも畏くも偉大なる太陽に真向けているが、何とも見るに堪えられぬ一物とは。当の本人は、自然の理にかなったことと、物理療法師気取りで悦に入って上々。

どこからか、懐かしいシマアオジの声。近くのヤチハンノキの梢で、きっとあの美しい胸をそらせて歌っているのだろう……等と想像しながら、いつしかウトウト眠りに入った。

大した時間ではないが、下半身の寒さで目が醒めた。太陽は相変らずまばゆいが、風が少し出始めていた。身作ろいをして大きく背を伸ばしながらあたりを見まわす。美々川のあたりに人影一つ。双眼鏡で確めると、札幌のHさんだ。どうやら沼岸伝いに美々川迄歩いて行かれたらしい。突然身体を走る熱いもの。……とすれば、草原の小鳥達の姿を楽しく観察され、おまけにみっともないが別の鳥のような物も観察されたというわけか。

時経なば、いつかは事の真相は明らむ、とそのままに今日迄過ごして来た。Hさんが小鳥を微に入り細に入り見られる姿を横で拝見する毎に、思い返えされるウトナイ沼北岸草原での出来事ではある。Hさんには今だに切り出せずにいる。訊ねない方がよいことでもあるが。

——（2）——

鳥を撮る時、できれば一人だけになりたい。何故なら、作業に没頭できるからという理由だけではない。声を出して鳥に話しかける私の姿を他の者に見られたくないからだ。然も、鳥に話しかける内容は決して品の良いものではないからである。

ウトナイ沼北岸草原の端に、数種がいつも共用するソングポストのヤナギがある。その日は、草の茂みから時たま顔を出すコヨシキリに、例の調子で話しかけていた。共用ソングポストでは、つい先刻迄オオジュリンとシマアオジが仲良く侵入者の私を見下していたのだ。私がコヨシキリにブツブツ文句をつけているうちに、一人の男がどこからかいつのまにか横に来ていた。やや大柄の中年で、黒々とヒゲなど生やしている。肩にはカセットレコーダを下げて、こちらを見るでもなく見ないでもなく、何ともうさん臭い。おまけにやたらのんびり歩いているのだ。「行くんなら早く行ってしまえよ。」と腹の中で一、二度繰り返しながら、その男を睨みつけた。首にかけた双眼鏡が妙に貫録ある。深茶のベレー帽が心憎い程似合っている奴だ……等と、ファッションに100パーセント自信がない己れにかこつけて、このあたりでは初顔のこの鳥屋さんを横目で見送った。

後日友人から話を聴かされてハットした。タンチョウの研究者として名高い、正富宏之博士だった。

縁あって、その後色々御指導を拝受したり、すっかりお付き合い願っているが、調査上のみならず、あらゆる面で「誠実」の代名詞のような先生の人格を拝見しては尊敬している。

ウトナイ北岸草原のセンサス中に、偶然私と会ったわけで、コヨシキリを口汚く罵っていた私の口上が、あるいは先生の肩から下げておられたカセットレコーダーに録音されていたかも知れない等と思うと今でも顔が熱くなってくる。

55年5月～7月までの予定です。（4月は38号に掲載）夏鳥たちの季節です。鳥の囀りを心待ちにしていた会員の皆さん。どうぞご参加下さい。

＜野幌森林公園＞

と　き　55年5月11日（日）
午前8時30分
集　合　国鉄大麻駅待合室

＜ウトナイ＞

と　き　55年6月8日（日）午前9時
集　合　国鉄千歳線植苗駅前

＜福　　移＞

と　き　55年7月6日（日）午前8時30分
集　合　札幌市営バス札苗線　福移入り口停留所

＜野幌森林公園を歩きましょう＞

上記の探鳥会のほか、次のように探鳥散歩を行ないます。どうぞご参加下さい。
と　き　5月25日。6月15日。7月20日
集　合　午前8時30分　大麻駅待合室

いずれの探鳥会も観察用具、筆記用具、昼食、雨具等ご持参下さい。2時～3時頃までに終了します。ひどい暴風雨でないかぎり行ないます。
連絡先　柳沢信雄　電話　851―6364番
　　羽田恭子　電話　611―0063番

◉旭川野鳥の会、日本野鳥の会旭川支部の主催で勇駒別一泊探鳥会があります。お誘いがありましたのでおしらせします。一応締切りはすぎていますが、参加御希望の方は大至急、電話で下記へ申込んで下さい。
会費5,000円（宿泊込）
旭川市旭岡1丁目　佐藤正三
電話（0166）51―4447番
交　通　旭川駅前、電気軌道バス、勇駒別行
白雲荘前下車
日　時　6月21日（土）22日（日）正午終了の予定
集　合　6月21日（土）午後5：40　白雲荘
体力にあわせて3コース予定されています。山にはまだ残雪がある見込ですので、その用意もおわすれなく。
※運がよければギンザンマシコが見られます。

小　　樽

54,12,9　11：00～14：30

渡 辺 紀久雄

船に乗っての探鳥という趣向に加え、小樽の街を見たいという気持ちから、小樽港の探鳥会を楽しみにしていた。駅の通りを下って、船乗り場に行った。愛護会と野鳥の会江別支部・小樽支部の合同探鳥会ということで、なかなかにぎやかだった。

小樽港内を探鳥したが、有難いことは、船長さんも会員だということで、港内の鳥の状況を熟知されており、鳥を見るのに合わせて船を動かしていただいたことだ。写真を撮りよい方向から、鳥に近づけてもらったりなどして、全くぜいたくな探鳥だった。

港には、ウやカモ類、カモメ類が多く見られた。複雑な模様のシノリガモは、一番の人気で、現われると感嘆の声が起こる。コオリガモも、すぐそばまで近づけた。例のア・アオナという声が頭に浮かぶ。ホオジロガモが群飛したり、ウミウとヒメウが並んでいて、大きさの違いをはっきり見せてくれたりした。カモメ類はオン・パレードで、7種類が現われた。ミツユビカモメを、はっきり見れたのは、うれしかった。黒班のある愛らしい顔が、印象的だった。

港内を回ったあとは、労働会館に場所を移して、昼食となり、そこで、アオバトなどの8ミリを見せていただいた。また、暖かい甘酒を、ごちそうになり、小樽支部の方々には、心から感謝申し上げたい。

散会のあと、せっかく来たのだからと運河や倉庫群などを見ながら街を歩いてきた。

仙台から札幌に来て、半年たらず、伊豆沼や蒲生のある宮城県、そして、鳥キチなら皆憧れる北海道に住み、鳥を見れることを、幸せに思っている。

〔記録された鳥〕ミミカイツブリ　ウミウ　ヒメウ　シノリガ　コオリガモ　ホオジロガモ　ユリカモメ　セグロカモメ　オオセグロカモメ　シロカモメ　カモメ　ウミネコ　ミツユビカモメ　スズメ　ハシボソガラス　ドバト　16種　探鳥開始前　ハクセキレイ　ウミスズメ

〔参加者〕浅野実枝子　岸本洋子　三木昇・道子　木村コト　野々村菊　柳沢信雄・千代子　清野久子　萩千賀　阿蘇トキエ　谷口一芳　吉本衛・純子　梅木賢俊　羽田恭子　叶野駒夫　清水幸・朋子・克幸・亜樹子　早瀬広司　福山研二　長谷川涼子　渡辺紀久雄　鈴木勇　三河登久　野口正男　他に日本野鳥の会小樽支部20名　江別支部10名　58名

〔担当幹事〕梅木賢俊　亀尾紋十郎
〒064 札幌市中央区南17西10　ファミリー河谷7号

藤の沢探鳥会

55,1,27　10：00〜14：00

小野寺 耕 三

開催数日前「お父さん探鳥会に行かない？」と家内と娘より、勧められてはみたものの、初めての事であり思案したが、娘夫婦も同道するというので出席する事とする。

当日は天気もまあまあで、出発に当っては幼時の頃、遠足に出かける時の気分にて胸をはずませいそいそと我家を出る。10時すぎに到着、既に20名の方々が先着され各々思い思いに探鳥中、まずは皆様に挨拶。初めての出席にて一応緊張気味でありましたが、会場には私共家族に対し野鳥の御指導下さった方や、面識のある方、又名前はかねがねお伺いしておりました方もおられ、更に出席された皆様の、何ともいえぬ暖かで和やかな雰囲気に、一安心した次第であった。会場は大変に展望のきく広大で自然環境もよく、加えて充分なる餌付け（多量の脂身・トウキビ）が施され、室内よりの野鳥観察には申し分なき所と痛感致しました。視界がきき手近かでの観察は勿論、飛び去る先迄も目で追う事ができ、今迄味わえなかった角度よりも充分観察し得た事で、出席してよかったとしみじみ喜んでおります。

斯く云う私は餌に集まり来る野鳥を眺め私自身一端の専門家にでもなった気分で隣の会員の方に「あ、今来たのはアカゲラの雄です。頭の後が赤くなっているでしょう。」「今来たのはミヤマカケスですね、この鳥は肉が大変美味しいそうですよ。」等と言っている自分にはっと我に返り赤面の至り。昼食時は豚汁に舌鼓をうちながら、平井幹事さんらの御尽力による、大福引の催しがあり、特に本会にふさわしき景品、加えて名文句に会員一同感心したり喜んだり笑ったりの大変楽しき一時を過ごした。ちなみに私の当てくじ……18番月給とり（鳥）に金一封お銭（アシ）が入りますとあり、のし袋に御祝、野鳥愛護会と書かれ景品は女性ショーツ、前面にフクロウのウィンクせる図柄をわざわざ刺しゅうせるものであった。註）このショーツはいても、図柄を見せる事も出来ず、額にでも入れて我家の探鳥小屋にでも飾って保存の予定。更に小堀氏より本会場付近に於ける野鳥の種類の概要説明があり、又鳥寄せのための環境作り（冬期の池）等の苦労話等がなされ、併せてシマエナガ等の餌付けの可能性又餌の選択等の話し合いが行なわれた。

そして最後に、小山氏よりキツネの生態についての話が披露され、短時間ではありましたが、大変有意義な楽しい一日を過ごしました。

今後共、この会が益々発展されることを祈りつつ、次回開催を楽しみにペンをおく次第であります。

〔記録された鳥〕不明カモ　ヤマゲラ　アカゲラ　セグロセキレイ　ヒヨドリ　ツグミ　エナガ　ハシブトガラス　シジュウカラ　シメ　スズメ　カケス　ハシブトガラス　13種

〔参加者〕佐藤佐　野々村菊　米山露子　佐藤栄邦　井上克之　寺田達雄　小野寺耕三　神野拓・敬子　柳沢千代子　鈴木勇　北尾諭　野口正男　渡辺紀久雄　谷口登志　曾根モト　平井さち子　飯山五玖子　早瀬広司・富　萩千賀　中島洋子　小堀煌治　長谷川涼子　小山弘昭　小沢広記

〔担当幹事〕平井さち子　小沢広記

〒064 札幌市中央区宮の森1条16丁目

藤の沢探鳥会で　楽しいなぞとき福引会

このたびは藤の沢なる探鳥会
　鳥キチあつまる神のまにまに
（クンネレクカムイの笛（エゾフクロウの笛））

鳥観てののちの心に比ぶれば
　昔はものを思わざりけり
（バードウォッチングのガイドブック）

小鳥の村の村長さん
酒と小鳥に惚れぬいて人生ますます味が出る
（だしの素）

札幌の鳥キチたち
北海道野鳥愛護会と日本野鳥の会と
　両会にまたがっている会員たち（パンスト）

ホトトギスなきつる方をながむれば
　有明の月ぞ残れる（花王石鹸）

ホトトギス　ホトトギとて明けに希里（栓ぬき）
月給取（鳥）に金一封―お銭（あし）が入ります―（パンツ）
雁（かりがね）や借りたお金は忘れずに（鳥形貯金箱）
てらつつき子は卵からうなづく
（キッツキのドアノッカー）

鶏口となるも牛後となる勿れ（鶏形のティバック置）
たつ鳥あとを汚さず
（トイレットペーパー）

鳶が鷹を生む
（卵形貯金箱とワシタカ科図）

足もとから鳥がたつ―泡喰う―
（缶ビール）

おしどり夫婦―いつもべったり―
（セロテープ）

日白押し
（鳥形和果子）

鶴の一声
（千歳鶴酒）

雀の学校の先生
（バードコール）

カラスなぜなくの
（うずらの卵）

新年懇談会

柳沢信雄

2月2日、13：30〜16：30　北海道婦人文化会館で恒例の新年懇談会を開きました。

札幌雪まつりと重なった土曜日のせいか、参加者は予想より少なく、広い会場がもったいないくらでした。

始めに、新妻副会長の年頭のごあいさとお話があり、続いて、遠く浦河町から参加してくださった宮木雅美氏が、エゾリスについてスライドを使ってわかりよく話してくださいました。

次に、札幌市の職員で地下街の「市民の広場」に毎月すばらしい野鳥写真を展示されている、猪口　卓氏と道自然保護課の萩　千賀さんの貴重な野鳥スライドをみせていただきました。

そのあと、参加者全員が野鳥観察歴や冬鳥情報、新年の抱負等を盛りこんだ自己紹介で楽しく終了しました。

いそがしい中、時間をさいて、土屋副会長、井上副会長も姿をみせてくださいました。

〔参加者〕

小沢広記　土屋文男　萩　千賀　羽田恭子　新妻　博　沢田摩耶子　長谷川涼子　苣野寿衛吉　早瀬広司　梅木賢俊　北尾　諭　宮木雅美　新宮康生　土田純一　岩泉ゆう子　井上元則　猪口　卓　柳沢信雄・千代子

鳥民便り

＜昭和55年度総会のお知らせ＞

昭和55年度の総会を次のように開催します。出席下さるようお願い申し上げます。

◇とき　昭和55年4月19日(土)午後2時

◇ところ　札幌市中央区北1条西7丁目　北海道婦人文化会館

◇ぎだい　1．昭和54年度事業報告及び会計報告
2．昭和55年度予算案及び事業計画案
3．役員選出
4．その他

＜会費納入お待ち下さい＞

皆様ご存知のように、今年から郵便料、用紙代など値上げが予想されます。したがって当会の運営経費も赤字になりますので会費値上げをしたいと思います。

値上げ幅は総会で決定致しますので、会費納入は総会終了後にお願い致します。

今号は、便りが少なくて、〝さえずり〟のコーナーを設けることができませんでした。函館の長尾さんから2つ話題をいただきましたので、ここで紹介します。

＜大沼のオオハクチョウ＞　長尾　康

昨年、この欄（35号）でお知らせしました「1C48の標識をつけたオオハクチョウ」は、昨年12月再び大沼に飛来してきました。ただ首の標識はとれ、足環のみつけていました。

＜函館湾のコクガン＞

毎年、冬の函館湾にコクガンが飛来して来ます。今年の「ガン・カモ科鳥類一斉調査」において、過去最高の117羽が確認されました。また分布地域も函館湾に限らず、木古内町の札刈まで及んでいました。さらに知内町では、200羽程確認したという便りも入っています。

〒041 函館市中道町30—2　窓明寮

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

55年最後の本誌を手にされる頃は、雪どけも進み春のきざしも目に見えて展開しているものと思います。

本号では、タイミングが悪いようですが、庭で野鳥を楽しむためのバードテーブル（餌台）について少しまとめてみました。取材に協力いただきました会員の方に厚く御礼申上げます。

誌面の都合上のせられませんでしたが、あつまってくる鳥達のお話もたくさんお聞きすることができました。いずれ、これだけの特集も組みたいと思っています。

このバードテーブルについては、最近札幌市内の一部で愛好者の行きすぎが、鳥仲間のあいだで問題となっています。会員の皆様にはくれぐれも行きすぎのないように配慮願います。

この種の企画をいろいろとやっていき、北国北海道の野鳥愛好者のテキストがまとめられるようになればよいと思っています。ご意見をおよせ下さい。　（三木記）

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費 1,000円（会計年度4月より）　郵便振替　小樽18287
〒060 札幌市中央区北4条西5丁目（林業会館）北海道国土緑化推進委員会内 ☎(261)9022